

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23652028

研究課題名(和文)日本語学習者が落語を通して学ぶ日本の笑いの研究

研究課題名(英文) Research on the learning of Japanese humor by students of Japanese through watching rakugo performance

研究代表者

酒井 たか子 (SAKAI, Takako)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40215588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：落語は日本独自のユニークな形態を持つ話芸であり、日本文化のエッセンスが凝縮されているが、日本語学習者にとって難しいと敬遠されがちである。日本語学習者の笑いを中心とする理解を明らかにするために、研究材料の作成および理解を分析するための方法を検討した。研究材料は、留学生の聞き手を対象とした約20時間に及ぶ映像、音声を集めた。江戸落語・上方落語、新作落語・古典落語、初級対象・中上級対象とバリエーションを持たせ、映像の編集、文字化を行った。学習者の理解を測るための方法として、会話分析の手法のほか、アンケート、絵による表出などを実施し、その有効性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Rakugo is an oratory art of Japan which features a unique format. While the essence of Japanese culture is distilled within rakugo, it has often been avoided as being too difficult for learners. In order to bring to light Japanese learners' understandings of Japanese humor, we have developed research materials and considered methods for analyzing learners' understandings of them. The materials consist of approximately 20 hours of audio/video recordings of live rakugo performances for foreign students. The materials include recordings of a breadth of varieties of rakugo, including tellings by both Edo and Kamigata performers, and performances keyed to both elementary and intermediate/advanced level learners. These materials were then edited and transcribed. As a methodology for analyzing learners' understandings of the materials, in addition to conversation analysis, instruments such as survey questionnaires, and responses through drawing were also employed.

研究分野：日本語教育

キーワード：落語 笑い 日本語学習者 理解

## 1. 研究開始当初の背景

落語は、一人の落語家がいろいろな登場人物を演じ分ける会話を中心に、ストーリーを運ぶという世界でもユニークな話芸である。人間の普遍的な「業」を描く一方で、その時代や場所を映す文化が色濃く表れる題材が取り上げられる。その根底には「笑い」が多く含まれるのも特徴の一つである。内容は、日常の挨拶の仕方から様々な人との付き合い方、親子関係、性、死など日本文化のエッセンスが凝縮されている。登場するのは、古典落語では落語の世界の住人として代表的な町人、侍、花魁、小僧から動物まで多岐にわたる。新作落語では、現代社会を舞台にした話も多く、学校生活など身近なものもある。高座だけの背景のない舞台上、小道具としては手ぬぐいと扇子だけを使うシンプルなものであるが、その表現の中から、聞き手は、演者と一緒にストーリーを追ったり、登場人物の人となりを読み描く。聞く側には、豊かなイマジネーションが求められ、落語家との共感が生まれる。

このように、日本文化や日本人の考え方を凝縮した存在である落語は、日本語教育や日本文化を紹介する上で利用価値が高いものであるが、背景知識や言葉の難しさなどにより、日本語学習者にとっては理解しにくいものと考えられてきた。しかし、これまで実際に落語を聞かせて、学習者は何が理解できるのか、笑うのはどのような場面か、効果的な補助的指導は何かなどに関して、実証的に行った研究はほとんどない。

## 2. 研究の目的

落語を日本語教育に取り入れるためには、日本語学習者が落語を聞いてどのように受け止めているかについての情報を得る必要がある。具体的な例としては下記のような課題があげられる。

- ・落語のどのような場面を面白いと感じるのか、また感じられないか。
- ・落語の難しいところはどのようなところか。
- ・落語の理解の仕方に関して、日本語力の違いにより何が異なるか。
- ・初級学習者と中・上級学習者対象の落語の材料を作成するためにはどのような配慮が必要か。
- ・日本語学習者の文化的背景、学習背景により、落語の理解の仕方がどのように異なるか。
- ・落語を聞いて、どのようなイメージを形成しているか。演者の描くイメージとどのような相違点があるか。
- ・学習者は、落語を聞く場に参加しているということを、どのような反応を通して示せるか。
- ・落語を聞いたときに「笑い」はどのタイミングで起こるか。

- ・日本語学習者と日本語母語話者の反応との差異はどのような点で見られるか。

本挑戦的萌芽研究の目的としては、上記のことを明らかにするために、まず(1)適切な調査場面を用意し、調査材料を作成すること、それらを利用して、(2)研究方法を検討することとした。

## 3. 研究の方法

### (1)適切な調査場面の設定および調査材料の作成

日本語を学習している留学生を聞き手として、優れた複数のプロの落語家による落語会(落語の紹介、多様な種類の落語)、落語ワークショップ、講演会を開催する。多様な落語に関しては、噺の長さ、登場人物、場面、話の種類などを考慮する。ワークショップは、日本語学習者が自ら作成した小咄や落語を演じる中で、落語家から指導を受ける形式とした。

上記のを使い、映像および音声の研究材料を作成する

日本語学習者の理解を観察し、分析するためのコンピュータプログラムを開発する。

### (2)研究方法の検討

日本語学習者、演者、および両者の相互の情報を得るためのさまざまな研究方法を実施し、検討する。

- ・日本語学習者を対象として、難しいところ、面白いところ、疑問点などの情報をアンケートにより収集する。
- ・日本語学習者を対象として、難しいところ、面白いところ、疑問点などの情報を個別インタビューにより収集する。
- ・日本語学習者によるイメージの図示を用いて、理解しているかを表出させる。
- ・演者である落語家を対象に、日本語学習者に演じる際に配慮した点や、母語話者対象との相違点について、インタビューにより情報を収集する。
- ・会話分析による理解の示し方を検討する。
- ・留学生と海外からの帰国生、留学予定の日本人学生との交流を通じて「笑い」の範疇の対比を検討する。

## 4. 研究成果

### (1)適切な調査場面の設定および調査材料の作成

技能に優れた複数のプロの落語家を招き、日本語を学習している留学生を対象とした落語会、落語ワークショップ、講演会をのべ14回開催した。

会の前に、落語家に本研究における狙いを伝え、学習者の日本語力や文化的背景などの情報を提供し、綿密な打ち合わせを行った。ワークショップでは、学習者に国の笑い話

を会話中心の日本語のスク립トを書かせる、言葉のシャレ（掛詞）からストーリーを作らせる、学習者に演じさせるなど、学習者が実際に主体的に行うことを通して、落語家からの指導を受けた。

基本的には、会は日本語のレベルにより、初級者対象と中・上級者対象に分けて行った。日本語のレベル差のある場合の影響や、日本語母語話者との反応を比較するために、一緒に聞く会も一部設定した。

落語家は研究協力者である柳家さん喬師匠を中心に5人に依頼した。東京（江戸落語）と大阪（上方落語）40年以上のベテラン真打と入門8年目の二つ目若手、男性落語家と女性落語家など異なるタイプである。

落語の内容は以下の通り。

- 江戸落語と上方落語
- 新作落語と古典落語
- 多様な小咄
- 落とし噺、怪談話、人情話

#### 映像および音声材料の作成

映像の総時間数は20時間以上に及ぶ。ビデオカメラは演じ手と聞き手である日本語学習者との相互関係の分析が可能なように、2台から4台のカメラを用いた。その後、利用目的に合わせて映像の編集作業を行った。

音声に関しては、演者のほか、複数の留学生、日本人に個別にICレコーダーをつけてもらい、笑いやつぶやきなどの音声による反応行為の採取を行った。演者の音声は文字化を行った。

映像データ、音声データを用いて、分析に利用可能なコンピュータプログラムの開発を行った。

これらの映像、音声材料とコンピュータプログラムを利用することにより、データを活用した次の研究段階へと進む準備が整った。

#### (2) 研究方法の検討

日本語学習者を対象としたアンケートおよびインタビュー調査

学習者の理解を捉える方法として、選択式と自由記述式によるアンケート調査およびインタビュー調査を行った。これらの結果から、今後の大量データ収集に向けての理解度および面白さに代表される情意的な側面を測定するための方法についての有益な情報を得た。

日本語学習者によるイメージの図示を用いた共感の理解の表出

言葉で表現されたことをどのようにイメージしてとらえているかを絵で表す方法を取り入れた。たとえば「死神」という落語では、落語家が口頭で描写した主人公の「死神」を聞き手がイメージしたものを絵にして表出させたところ、性別、年齢、服装、表情など母語話者の理解とは大きく異なる各自の文化の影響を受けたイメージを持っている

ことが分かった。図1に例を挙げる。



(図1「死神」のイメージ 例)

またストーリーの中から4場面を取り出して4コマの絵に表現する手法では、印象に残った場面や、その状況の描写など興味深い情報が得られた(図2参照)。

口頭では得にくい情報を、このように図示させるといふ手法の有効性が明らかになった。



(図2「死神」の噺を聞き4場面に描写 例)

日本語学習者と日本語母語話者が一緒に聞く場面の設定

日本語学習者と日本語母語話者の反応がどのように異なるかを比較すること、および日本語母語話者の反応が日本語学習者にどのように影響を与えるかについて検討を行った。

#### 演者である落語家からの情報収集

日本語学習者を対象としたときと、一般の落語会等での母語話者を対象としたときを比較し、理解の違い、理解の示し方の違い、

演じる際の留意点などに関して、インタビューにより情報を得た。

#### 会話分析による理解の示し方の検討

会話分析の立場から、落語会における観客による笑いの組織化に着目した。その中で、例えば、「ボケ+ツッコミ」という構造的フォーマットが落語家によって提示され、それが観客に対して笑う位置を知らせる合図の役割を果たしうること、そして、そのような合図が提示されたにもかかわらず適切な笑い行為を産出しない場合、落語家による「笑いの追求」が確認される場合があり、それによって出された合図に対して笑うというのがこの状況下で期待される行為であるという志向性を示していることが分かった。また、落語を視聴する留学生がどのタイミングで笑うかに関しても分析を行った。

#### 会員カテゴリー化分析による落語のおかしみの分析

おかしみを達成するために、噺の中での登場人物がどのようにカテゴリー化されるか、そして落語家が演じる上で、あるカテゴリーに帰属していることを示すための権限、行為、属性などについて検討した。また、このようなカテゴリー化を提案することで可能になる理解の流れについて検討した。

#### 留学生、帰国生および留学予定の日本人学生との交流を通じた「笑い」の範疇の対比

海外在住が長い日本人学生と留学を予定している日本人学生に対して、落語会に参加するための準備段階として、個々の学生が捉えている笑いの感覚を分析させた。さらに多文化・多言語環境における笑いの範疇の重複点と相違点を分析した。その後の落語会において、笑いのタイミングの違い等を分析させ、日本語・日本文化を効果的に伝達する際の注意点を議論させた。

日本語学習者に対する落語の教育的利用に関する効果的な方法の提案を行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計3件)

Bushnell, C. On developing a systematic methodology for analyzing categories in talk-in-interaction: Sequential categorization analysis, *Pragmatics*, 査読有, 24, 2014, 735-756

Bushnell, C. Talking the talk: The interactional construction of community and identity at conversation analytic, data sessions in Japan, *Human Studies*, 査読有, 35, 2012, 583-605

Bushnell, C. Identity in practice: The

use of terminological resources and identity formation at conversation, analytic data sessions in Japan, *日本語用論学会大会発表論文集*, 査読有, vol.7, 2012, 143-150

##### [学会発表](計12件)

酒井たか子, Bushnell, Cade, 柳家さん喬 第2回ことばと文化のコラボレーション, 2015年1月26日 筑波大学(茨城県, つくば市)

Yamada, Toru, Implementing "Cool Japan: " A Nation Branding Policy on Shaky Ground, " JASCA 50th Anniversary Conference and IUAES Inter-Congress 2014 Joint Convention, 2014年5月30日, International Conference Hall of Makuhari Mess, Chiba, Japan

Bushnell, Cade. A time to laugh: Audience laughter at a rakugo performance for foreign students in Japan. Paper presented at The 8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ8), March, 22, 2014, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Tachikawa, Tokyo.

酒井たか子, Bushnell, Cade, 柳家さん, 喬, Andre J. Bekes, 落語と日本語教育 第1回ことばと文化のコラボレーション, 2014年2月12日 筑波大学(茨城県, つくば市)

亀井敦郎, 落語の小咄におけるおかしみの分析 会員カテゴリー化分析を中心に, 第1回ことばと文化のコラボレーション, 2014年2月12日 筑波大学(茨城県, つくば市)

董然, 孫鍼, 落語小咄のe-learningのためのプログラム開発, 第1回ことばと文化のコラボレーション, 2014年2月12日, 筑波大学(茨城県, つくば市)

Yamada, Toru, Dialogic Heritage: How a Local Heritage Transforms into a National Heritage, the 112th Annual Meeting of the American Anthropological Association 2013年11月23日 Chicago, Hilton, Chicago, (USA)

Bushnell, Cade, She who laughs first: A look at the organization of audience laughter at rakugo performances, Presentation at the Symposium on Rakugo Research, October 11, 2013, University of Vienna, Vienna, (Austria)

SAKAI, Takako, On the effective use of *rakugo* in Japanese language pedagogy, Presentation at the Symposium on Rakugo Research, October 11, 2013, University of Vienna, Vienna, (Austria)

酒井たか子, 日本語教育に落語をどのように取り入れるか, 日本語教師連絡会議  
2013年09月12日, Akol Hotel, Canakkale  
(Turkey)

酒井たか子, ブッシュネル・ケード, 林家染雀, ピランディソヴァー・シルヴィエ, 関崎博紀, 落語がわかるということ  
- ことばと文化の側面から - 日本語教育  
国際研究大会パネル発表, 2012年8月18  
日, 名古屋大学 (愛知県, 名古屋市)  
ブッシュネル・ケード, 笑ってる場合?:  
留学生を対象とする落語会における笑いの  
位置とその組織化, 日本語教育国際研  
究大会パネル発表, 2012年8月18日, 名  
古屋大学 (愛知県, 名古屋市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

酒井 たか子 (SAKAI, Takako)  
筑波大学・人文社会系・教授  
研究者番号: 40215588

### (2) 研究分担者

ブッシュネル ケード  
(BUSHNELL, Cade)  
筑波大学・人文社会系・准教授  
研究者番号: 30576773

山田 亨 (YAMADA, Toru)  
筑波大学・人文社会系・助教  
研究者番号: 60706943

### (3) 研究協力者

柳家 さん喬 (YANAGIYA, Sankyo)  
落語協会 落語家

亀井 敦郎 (KAMEI, Atsuro)  
筑波大学・大学院人文社会研究科・大学院  
生

董 然 (TO, Zen)  
筑波大学・システム情報工学研究科・大学  
院生